

■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

* :著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

CC:著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

②:パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし:上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利的かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 UTokyo OCW 学術俯瞰講義
Copyright 2014, 吉見俊哉

The University of Tokyo / UTokyo OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series
Copyright 2014, Shunya Yoshimi

学術俯瞰講義2014年夏学期
新・学問のすゝめ

新・学問のすゝめ

—大学は、何処から来て、何処へ行くのか—

情報学環
大学総合教育研究センター
大学文書館
吉見俊哉

I 大学の現在

爆発する大学とグローバル競争

● 90年代以降の大学「改革」≠60年代の大学「大衆化」

1. 制度改革 ①大綱化=教養部解体 ⇒ 教養教育の崩壊?
②大学院重点化 ⇒ 大学院生の凡人化?
③国立大学法人化 ⇒ 国立大学の企業化?

2. 18歳人口の減少 ⇄ 大学数の増加

1945年 48校 → 50年 201校

→ 60年 245校 → 70年 382校

→ 80年 446校 → 90年 507校

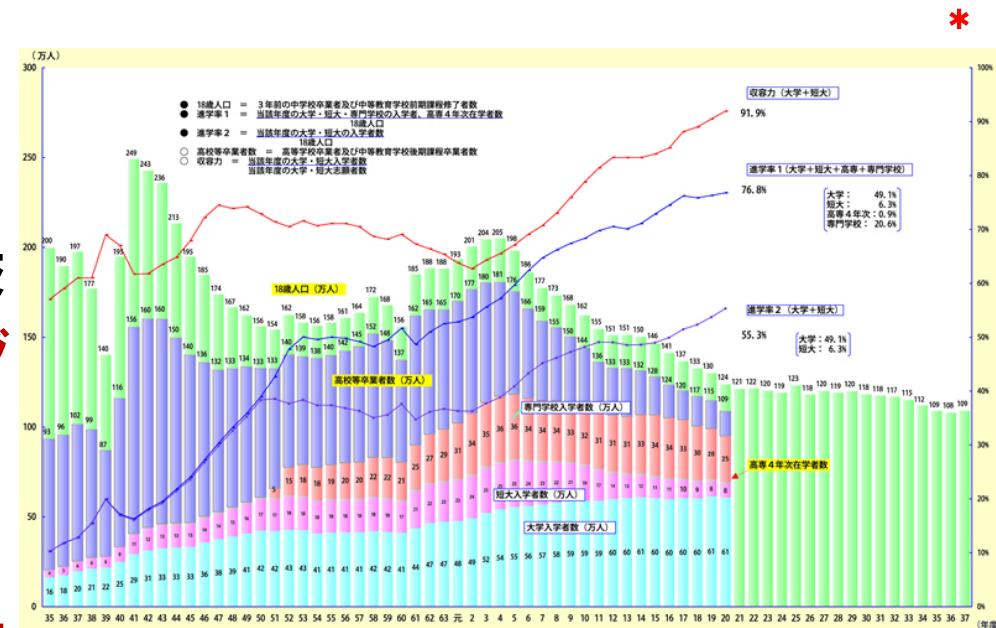
→ 2000年 649校 → 08年 765校

⇒ 質の低下(志願者マーケティング)

● グローバルな大学間競争

日本型大学体制の限界

⇒ アメリカ一辺倒の陥穰



平成20年度文部科学白書 第2部 第3章 第1節図表2-3-1
「18歳人口及び高等教育機関への入学者数・進学率等の推移」

http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaa200901/detail/1283626.htm

知識革命と社会の地殻変動

知識の地殻変動 ←→ 人材の地殻変動

- 知の市場化

←過剰な市場主義の支配

- 知のグローバル化

←アメリカンな制度の支配

- 知のデジタル化

→知識基盤の変容

出版からネットへ：

- グーグル・プロジェクト
- デジタル・アーカイブの発展
- 百科事典としてのネット

- 知の細分化と閉塞？
全体を見る目の喪失？

- 人材流動性の拡大：

年功序列の会社主義から
能力中心の個人主義へ

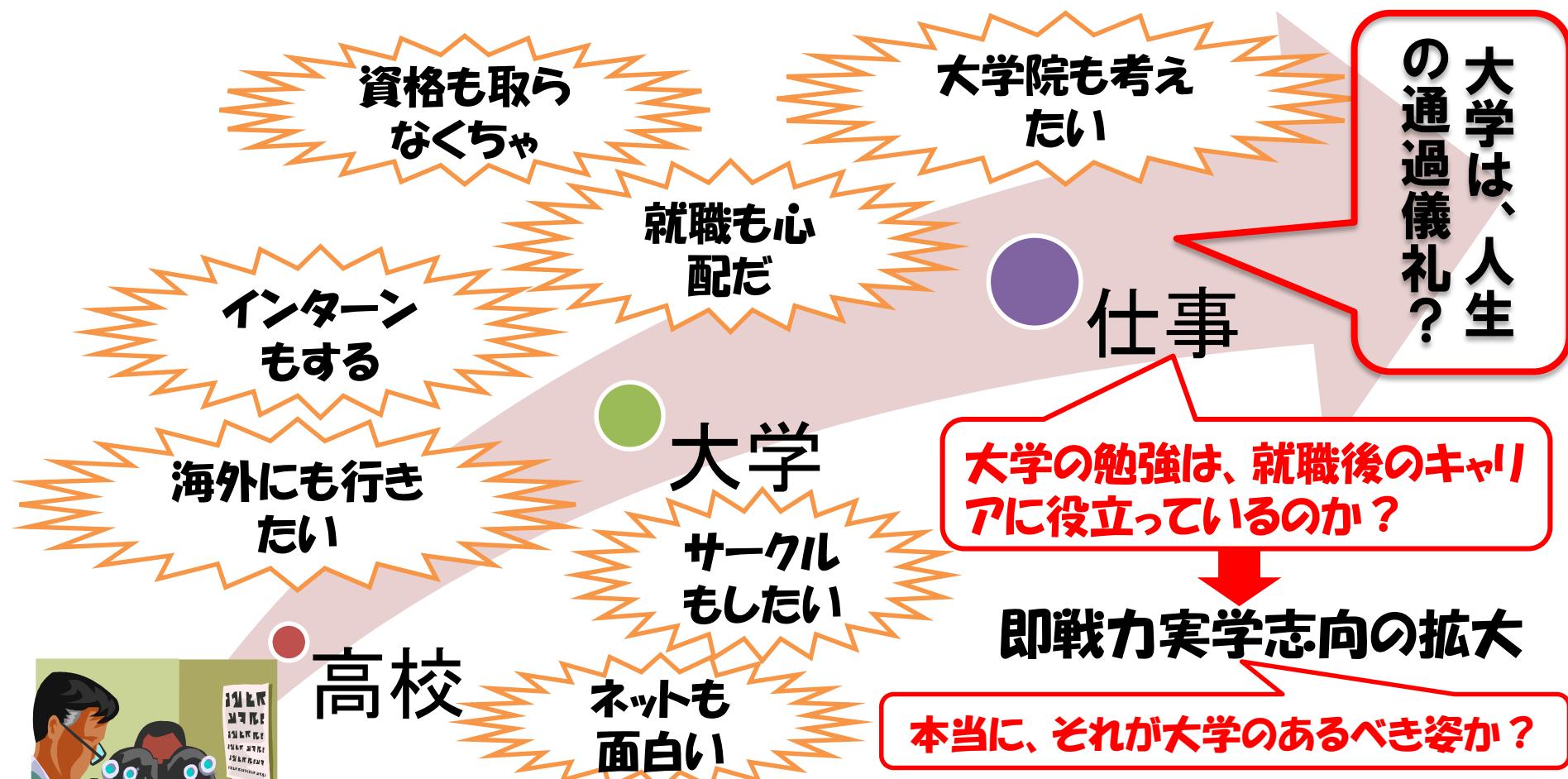
- 社内での徒弟制的な
人材育成の限界

- **人材育成の場としての**
大学への要求の増大

- グローバルに活躍できる
人材への需要

- 技術**知識**と社会的視
野の融合領域の拡大

大学生の現在：多面性の時代を生きる困難



高校

才能とは、執念だ！

でも、その執念を、どうやって見つければいいの？

大学教授の現在：1人3役はこなせない

いまだきの大学教授は、このすべてができないことはならない！

本当に、そんなことが可能なのだろうか？

研究者

- 理系は実験
- 文系は著作

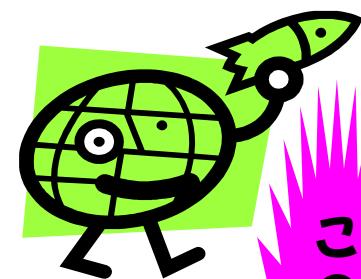
管理者

- 現状把握
- 制度設計
- 意見調整
- 人事管理

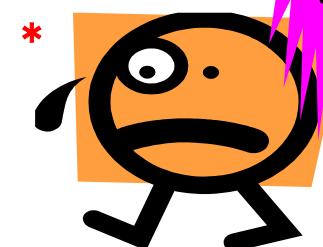
教育者

- 授業
- 指導
- 審査

やっぱり大学を改革しなくっちゃ、、、



二極化する大学教授



私をそっとしておいてほしい、、、

この矛盾を生きる

大学の苦悩：変革の理念、人材、資金

- **理念は共有されているだろうか？**
 - 異なるDNAの集合体
 - 大学の「自由」と部局の「自治」と研究室の「伝統」
- **人材はいるだろうか？**
 - アカデミック・アドミニストレーターと研究者
 - 文部科学省は「改革」の震源となり得るのか？
- **大学は信頼されているだろうか？**
 - 産業界における成績・学位・人材能力の評価
 - 公共的予算の投入
 - 日本の大学「常識」と世界の大学「常識」

誰が大学を救えるのか？

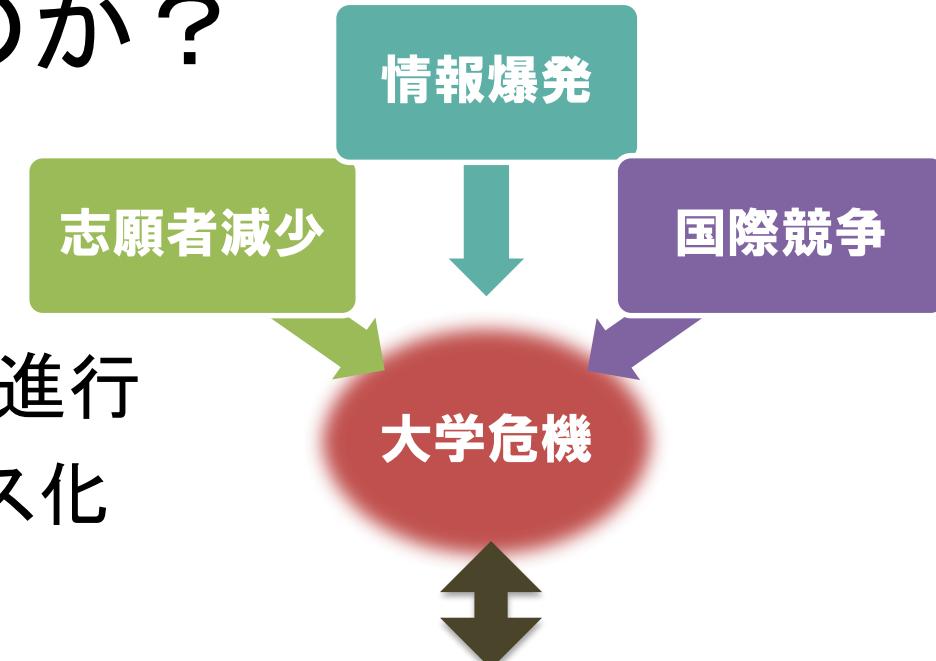
大学が直面する三重苦

- ① 大学の量的拡大と少子化
- ② グローバル化の加速度的進行
- ③ 知識の複雑化とボーダレス化



変革の主体：

- ① 国の大学政策?
→後退する国民国家
- ② 産業界+世論?
→研究教育への無理解
- ③ 大学自身?
→教授会との絶えざる折衝



教授会自治≠大学自治

- ① 職員の疎外: アドミニストレーター不在?
- ② 学生の疎外: 「大学=教授」vs「学生」
- ③ 大学の疎外: 「部局」vs「本部」
←教授の権益を守るギルド?

➡ ビジョンを共有する協働

福澤諭吉『学問のすゝめ』第四編

- 日本初の大学論(本全体は、身分制→能力主義) ⑨
- 国(Nation)の独立:人民 ≠ 政府
- 現状:人民=無氣無力の愚民↔政府=專制の政府
- 洋学者=近代知識人の役割

「我国の文明を進るには、先づかの人心に浸潤したる氣風を一掃せざるべからず。これを一掃するの法、政府の命をもってし難し、私の説諭をもってし難し、必ずしも人に先って私に事をなし、もって人民の由るべき標的を示す者なかるべからず」

- 知識人⇒官>民への批判

「学者士君子、皆官あるを知て私あるを知らず、政府の上に立つの術を知て、政府の下に居るの道を知らざる」

- 私立 ⇔ 官立

「百回の説諭を費やすは一回の実例を示すに若かず。今我より私立の実例を示し、人間の事業は独り政府の任にあらず、学者は学者にて私に事を行うべし」 → 加藤弘之等への批判



福澤諭吉
『学問のすゝめ』
岩波書店、1942年

<http://www.iwanami.co.jp/cgi-bin/isearch?isbn=ISBN4-00-331023-3>

明六社と〈私学—官学〉論争

←福澤による批判への反応：②

加藤弘之： 国権>民権

「先生の論はリベラールなり。……リベラールの論甚だしきに過ぎるときは、国権はついに衰弱を得ざるに至るべく、国権ついに衰弱せざるを得ざるに至る」



森有礼： 国家＝国民

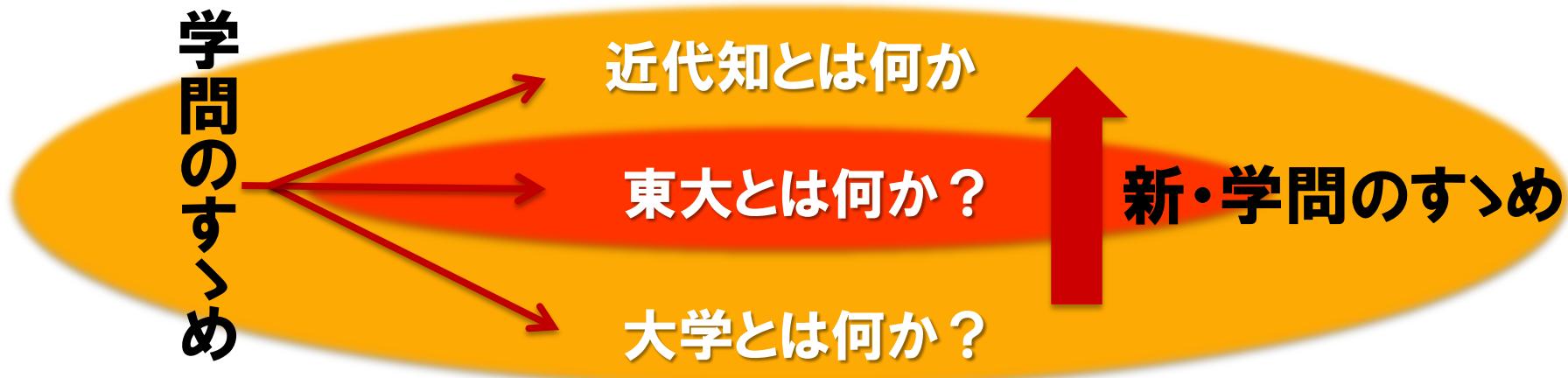
「何をか民という。その務をなすの権と、その責を担当すべきの義とを有する者を指すなり。ゆえに官吏も民なり、貴族も民なり、平族も民なり。日本の版籍に属する者、一人も我民名を免れるを得ず。またその責を担当せざるを得ず。しこうして政府は万姓の政府にして、民のために設け、民に拠って立つところのものなり」



津田真道： 政府→人民

「政府はなお精神のごとく、人民はなお体骸のごとくなり。けだし精神と体骸を相合して人身を成し、政府と人民を相合して国家を成す」③

東大とは？→大学とは？→東大とは？



- 大学は、二度生まれている
(中世都市、国民国家、Global Networks)
- 大学とは、「メディア」である
(出版、博物館・図書館と大学)
- 大学とは、「自由」である
(自由知と有用知のダイナミクス)

吉見俊哉
『大学とは何か』
岩波新書、2011年

http://www.iwanami.co.jp/ensyu/sin/sin_kkn/kkn1107/sin_k600.html

II 大学の過去

大学の一度目の誕生

中世都市における大学の誕生

- ボローニャ大学 1158年 ← 神聖ローマ帝国皇帝
- パリ大学 1231年 ← ローマ教皇

⇒ 中世都市の交易ネットワークの興隆：商人～修道士

ユニヴァーサティ＝協同組合

学生・教師の協同組合（自由な移動）⇒ 都市支配層
→ 教皇権・皇帝権の巧みな利用、資本としての知識

法学（ボローニャ）⇒ 神学＋学芸諸学（パリ）

アリストテレスの革命 → 理性の府としての大学

- ← 古代ギリシャの学芸のイスラム経由での再流入
- 「自由」な知識人達：アベラール～トマス・アクイナス

大学の一度目の死

- 大学の量的増殖: 14~16世紀 → 資格授与機関 = 知の形骸化
: イングランド(オックスブリッジ)、北欧 → 中欧(プラハ、クラカウ、ウィーン)
 - 教育内容・方法の統一性、ラテン語と国際教授資格
 - アリストテレス哲学とキリスト教神学の調停
→ 托鉢修道会による大学支配: 神学部 vs 学芸学部
- 欧ヨーロッパ的大学システムの崩壊
 - 領邦国家 + 宗教戦争 → 欧ヨーロッパ性の崩壊
 - グーテンベルクの印刷術: 写本の知 → 印刷本の知
 - 終焉する移動の時代: 転換点としてのコペルニクス
 - 絶対王政と専門学校・アカデミー・百科全書派
 - 大科学者・大思想家の時代と出版ネットワーク

大学の知 出版の知

16世紀初頭のメディア革命：写本から印刷へ

- 本の生産量の劇的増加＝知識の大量複製・普及（情報爆発）
 - ⇒知識を求めての放浪の時代の終わり＝中世的大学システムの基盤の喪失
 - ⇒多数の本を集めての比較照合の時代の始まり
- 社会的記憶の変化：秘伝から公開の知識へ
 - ⇒出版を通じたネットワーク形成：修道院長、大学教授、天文学者、医者、編集者、植字工、機械工、挿絵画家等、出版に携わる職人や専門家のネットワーク化

メディア革命から社会革命へ：16～18世紀＝「近代」の創出

- 宗教改革＝教会堂と印刷本の闘い
 - マルティン・ルター＝豊富な出版の経験→印刷を教会批判に縦横に活用
- 科学革命（コペルニクスの地動説 ⇄ 同時代に重大な天文学的発見はない）
 - 天文学者が本格的に印刷された数表等を利用 ⇒ データの比較照合による仮説検証
- 国民と国語の形成＝大量の印刷物の流通＝母国語の誕生
 - 出版業者：エリートたちのラテン語市場の飽和 ⇒ 民衆の俗語世界の市場化
 - （俗語の標準化＝新たな書籍市場として魅力のある国語＝出版語の市場形成）

大学の二度目の誕生

● アカデミーの時代と衰退する大学

- ・ 新知識ネットワークとしてのアカデミー:フランス、英國
- ・ フランス革命→ナポレオン帝国:「文明」のフランス
↔ 敗戦国ドイツの「文化」:「大学=国民」の復興へ

● ドイツ啓蒙主義と「大学」概念の再定義

- ・ カント:有用な学(神学・法学・医学)とリベラルな学(哲学)
- ・ シラー+フィヒテ:国民／人格の根幹としての「文化=教養」

● フンボルト型大学の発展:「教育」と「研究」の一致

- ・ 文系におけるゼミナール、理系のおける実験室
- ・ イングランドへの波及:文学化(ニューマン、アーノルド)
- ・ スコットランドとニューイングランドへの波及:工学化

「大学院」の発明

- 19世紀におけるドイツ大学制度の圧倒的優越
 - 留学生のメッカとしてのドイツ ⇄ ドイツモデルの世界化
 - イングランドにおけるドイツモデルの文学化：
 ドイツ大学の「ギリシャ哲学」⇨英国大学の「シェイクスピア」
- 米国にはユニバーシティができなかつた！
 - 上級高校としてのカレッジ(一般教養) ⇄ ユニバーシティ
 - ドイツを追い越す奇策としての「グラデュエート・スクール」
 ： ジョンズホプキンス大学と「学位」のシステムティックな「生産」体制
- 20世紀：アメリカン・スタンダードの時代へ
 - 両大戦を通じた一元化と大衆化：知識のアメリカ化
 - アメリカ型大学モデルの世界化 → ドイツ大学のアメリカ化

III 日本の場合

専門学校から帝國大学へ

● 東京大学は、本当に明治10年に創立されたのか？

- ・ 幕府天文所 (1684) → 蓼書調所 → 大学南校 → 文学部／理学部 ← 独英
- ・ 幕府種痘所 (1858) → 大学東校 → 医学部 ← 独
- ・ 司法省明法寮 (1871) → 東京法学校 → 法学部 → 法学部／経済学部 ← 仏
- ・ 工部省工学寮 (1871) → 工部大学校 → 工学部 ← スコットランド
- ・ 内務省農事修学場 (1874) → 駒場農学校／東京山林学校 → 農学部 ← 米
- ・ 第一高等学校 (1894) → 教養学部 ← 独米

専門学校・高校の寄せ集めとしての東京帝大：知識の移植機関

← 森有礼による「帝國大学」(1886) 思想：天皇制とキリスト教

● 増殖する帝大：京都、仙台、福岡、札幌、京城、台北、大坂、名古屋

← 学知の帝國システム：教員キャリア、理工系中心、総力戦と附置研究所

● 翻訳する志士と私学・出版・研究会の知

- ・ 蘭書の翻訳ブーム(1810年代) → 洋学ナショナリズム ⇄ 儒学・国学の衰退
- ・ 明六社における森有礼と西周、福沢諭吉：慶應・早稲田と自由民権の知

南原=矢内原体制と戦後東京大学

1938.12～43. 2 平賀讓: 海軍、平賀肅学、**1943 肺炎で総長のまま死去**

1943.3～45.11 内田祥三 ⇄ GHQによる東京大学本郷キャンパス接收

1945.12～51.11 南原繁: 1889-1974 ←新渡戸・内村 1921法助教授

1951.12～57.11 矢内原忠雄: 1893-1961 ←新渡戸・内村 1920経済助教授

● 南原=矢内原総長時代: 1945～57

南原総長: 1945～51

矢内原:

- ・ 社研所長(初代)
⇨京城帝大社会科学系
- ・ 経済学部長(再建)
- ・ 教養学部長(初代)
⇨新渡戸旧制一高校長

:独立学部化(←駒場旧制一高)／前期2年／進振り ⇄ 本郷専門諸学部

12年に及ぶ帝大から東大への転換期

- ・ 教養学部の誕生
- ・ 「一般教養」概念の創出・基盤化
- ・ 「問題」としての学生の発見
- ・ 大学出版会の創設
- ・ 社研・生研・新聞研等附置研究所の誕生
- ・ 大学院の設置

矢内原総長: 1951～57

- ・ ポポロ事件、矢内原3原則、学生相談所、学生問題研究所、全学連・安保

戦後教育改革と新制大学

占領期教育改革：

- 複線型モデルから**単線型モデル**への一元化：6+3+3+4制
- 大学の激増(専門学校、高校の大学化)：49校 → 226校
 - 誰が転換を主導したのか：米国教育使節団／CIE教育課
教育刷新委員会／**南原東大総長**

南原繁と新制東京大学：

- 総力戦体制の延長としての新制大学(昭和研究会＝近衛体制)
- 新制東京大学／帝国大学の根幹をなした**プロテスタンティズム**
南原繁：神の眼差し ⇔ 国家の眼差し v.s. 森有礼：神の眼差し＝国家の眼差し
- 知識の統一体としての大学 ⇔ 占領軍による民主化
市場万能主義
社会革命主義
- 知の専門分化が孕む危機→新しいリベラルアーツ＝教養学部
→ 総合知としての一般教養／教養学部、東大出版会、東大新聞……

大学紛争 1968-69

慶應 1965.1.20 – 65.2.5

↔ 学費値上げ

早稲田 1966.1.18 – 66.6.21

↔ 学費値上げ

日大 1968.5.27 – 69.2.9

↔ 巨額の使途不明金と教育の質

⇒ 機動隊導入 11/12

東大 1968.1.27 – 69.1.19

↔ 知の権威主義

1/27 医学部闘争

7/2 安田講堂占拠

11/1 大河内総長辞任

1/18-19 安田講堂攻防戦

3月：入学試験

日大 2/11 実施

東大 1/20 政府から中止命令

4月：企業入社

from Wikipedia



東大

- ・山本義隆
- ・塔
- ・反権威主義
- ・研究者
- ・自己否定

from Wikipedia



日大

- ・秋田明大
- ・路上
- ・反商業主義
- ・会社員
- ・自己肯定

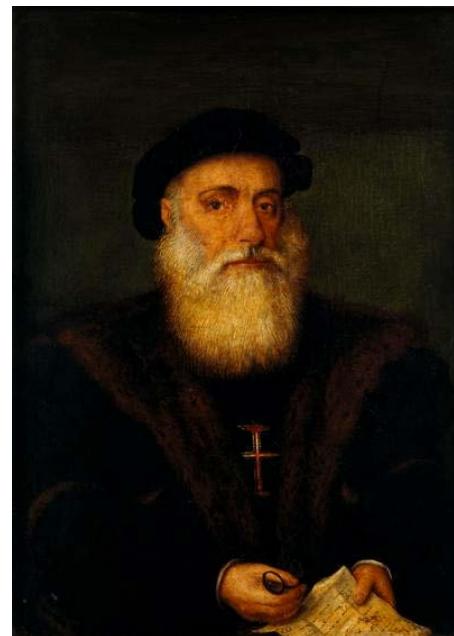


IV 大学の未来

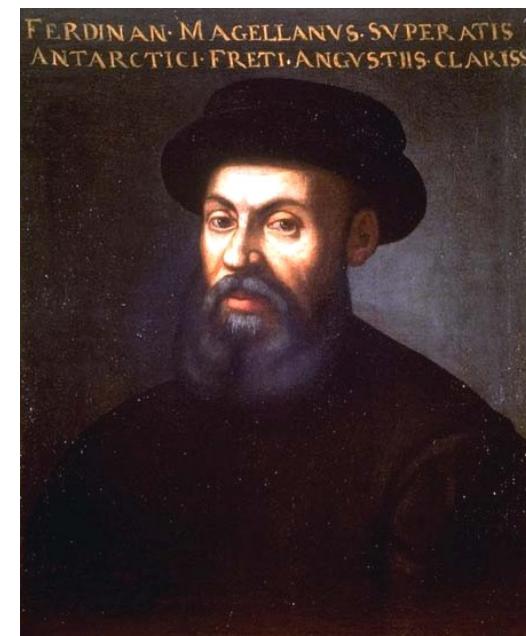
大航海時代からグローバリゼーションへ



Cristoforo Colombo
1451年頃～1506年
1492年、1493年、1496年
新大陸発見(スペイン)
ポルトガル・スペインによる征服



Vasco da Gama
1469年頃～1524年
1497年、1502年、1524年
ポルトガル～喜望峰～インド



Ferdinand Magellan
1480年頃～1521年
1519～22年 世界一周

徳川幕府から明治維新へ

アメリカ化とグローバル化

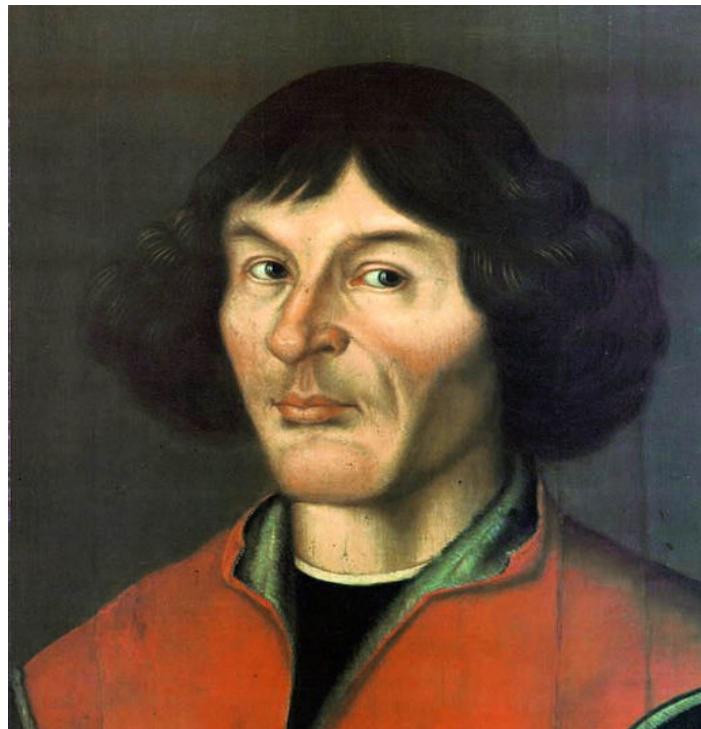
16世紀の世界貿易
石見銀山と鉄砲伝来

オランダ進出から
大英帝国へ

グローバリゼーションと日本社会

印刷革命から情報爆発へ

②



Nicolaus Copernicus

ポーランド 1473年～1543年

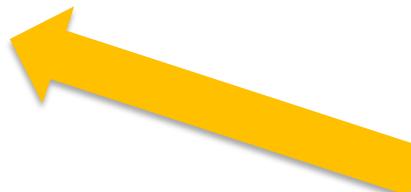
クラクフ大学 神学

ボローニヤ大学 法学 数学

パドヴァ大学 医学

地動説 1543年

- 天動説から地動説へ
- 天文学上の大発見？
- 印刷された天文学データ
- 16世紀の印刷革命



15世紀(中世)から
16世紀(近代)へ

②



Johannes Gensfleisch zur Laden zum Gutenberg
ドイツ 1398年頃～1468年
『グーテンベルク聖書』印刷(1439年頃)

なぜか似ている16世紀と21世紀



3つのビジョン

1. 宮本武蔵(二刀流/2足の草鞋)の教え：
→複雑化した知識社会の多元的な普遍性
2. 甲殻類から脊椎動物への進化：
→背骨の通ったボーダーレスな学び
3. 人生の通過儀礼からキャリア/ビジョンの
転轍機への転轍：
→学年制キャリアから単位制キャリアへ
⇒人生で3回大学を出るのが当然の社会へ

「新・学問のすゝめ」は誰のために？

- 2 4月16日 “Beat the whites”と”by Jap anyway”の間
—物理学者の屈辱と栄光
- 3 4月23日 内田祥三・丹下健三と建築学の戦中・戦後
- 4 4月30日 平賀譲における造船学と肅学のあいだ
- 5 5月 7日日本における近代ドイツ医学の受容と東京大学における展開
- 6 5月14日 南原繁と戦後の東大
- 7 5月21日 美濃部達吉と日本の「憲法・国法学」
一大正デモクラシーと大正コロニアリズムのあいだ
- 8 5月28日 白鳥庫吉と日本における東洋学の形成
- 9 6月 4日 高野岩三郎と日本の経済学
- 10 6月11日 ヘンリー・ダイアーと日本の工学
- 11 6月18日 戸田貞三と日本の社会学
- 12 6月25日 藤澤利喜太郎と日本の数学
- 13 7月 2日 鼎談一大学紛争と学問の未来